

平成二十五年度 大洲市地域福祉（ボランティア）研修会開催

二月九日（日）、大洲市総合福祉センターにおいて、「大切なのは人の愛、親子・家族・地域の絆」をテーマとして大洲市地域福祉（ボランティア）研修会を開催しました。当日は、市内を中心に約二百三十名の参加をいただきました。

開会行事の後、向野幾世先生（NPO法人「かかし」の会（障がい者自立支援の会）（理事長）を講師にご講演をいただきました。

先生は、奈良県立西の京養護学校長、奈良県立教育研究所障害児教育部長等を歴任されながら、障がい児教育の機会拡大や、障がい者と健常者の共生を目指して、脳性マヒ者自立の家「たんぽぽの家」づくり運動、「わたぼうしコンサート」活動のバックアップ等様々な活動をされています。



向野幾世先生です。着ておられるのは、ベトナム民族衣装のアオザイで、「この服にまつわる活動のお話もしていただきました。」

またその他にも、二〇一一年の冬には、東日本大震災で、家族を亡くした子どもたち二十五名を率いる団長として、キプロスに向かわれました。暖かい場所でも過ごしてもらう目的で、キプロス政府から招待を受けての十五日間でしたが、先生は初日に、緊張している様子の子どもたちを見て、まず彼らのシャツの背中に日の丸をマジックで描き、「あなたたちは日本の外交官」と声をかけて、子どもたちを勇気づけられました。

先生の障がい児教育のきっかけのひとつとなったご家族のお話もされました。先生が子どもの頃、脳性マヒのお父様が、来客時に廊下を這って出て行かれたところ、お客さんに「しっしっ、あつちいけ」、「汚い、そばに寄るな。」と言われたそうです。それを何度か聞いた先生がお父様に、「悔しくないの？」と涙ながらに聞かれました。その時お父様は、「悔しくない。なぜなら、立場が逆になれば、自分も同じことをやっただけかもしれない。それよりも、心根の素晴らしい人にも出会っている。それが何よりうれしい。」お父様から返ってきた言葉はこのようにとても前向き

だったそうです。そしてまた、子育てをしながら、お父様を支え続けたお母様の存在も大変大きかったと言われました。



笑いあり、涙ありのお話で、最後まで楽しく聴かせていただきました。

また、学校や地域で引き受ける「役」についてのお話もされました。何か役をしなければならぬ時、断る理由を考えて逃げようと思う方が多いけれど、それはとても損をしていることになる。先生の息子さんの保育所時代を例に出して話されました。人前で話すことが苦手だったご主人が保育所の保護者会会長を引き受け、挨拶の時、緊張して大失敗されました。しかし、「親が子に残すものはぶざまで良い。子どもが大人になったとき、『お父さん、お母さん、

昔あんなことがあったね。』と温かい気持ちで思い出してくれるから。」とのことでした。

内容が多岐にわたった先生のお話は、時間が経つのも忘れるほど聞く者の心を引き込みました。そして、どれも先生のお人柄が伝わる心温まるお話でした。家族や地域の人々がそれぞれ関わりを持ち、思い出を積み重ねていけば、自然としっかりしたつながりができる。それは、有事の際、一人ひとりが思いやりの心を持って支え合うことができることにもつながるのだと教えられました。また、一人の力は小さいけれど、一人が行動を起こさないと何も始まらないということも気づかせてもらいました。

講演後、参加者の方から返ってきたアンケートには、「言葉が宝物のようにしみた」、「行動した分だけ人に感動を与える」、「今後の自分の生き方、地域の方々との絆などについて非常に参考になった」、「母に会いたくなかった」、「一歩ずつ少しでも変わっていくと思う」、「若いお母さんにも聞いて欲しい。」等多くの感動の声を書きつづられていました。

この日の参加者である地域福祉に携わる方々は、日頃、活動の中で様々な悩みに直面することが多いと思います。この研修会が、そんな方たちの心を少しでも軽くし、今後の活動に晴れやかな気持ちで取り組んでもらえる手助けになれば幸いです。